

Title	那宅花園における梅蘭芳と大倉喜八郎の邂逅：1919年梅蘭芳帝国劇場公演の起点と『天女散花』
Sub Title	The encounter between Mei Lanfang and Ōkura Kihachirō at Najia Garden : Tiannü sanhua and starting point of Meilanfang's performance at Teikoku Gekijō in 1919
Author	平林, 宣和(Hirabayashi, Norikazu)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2014
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.106, (2014. 6) ,p.76 (305)- 86 (295)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	2013年度慶應義塾大学藝文学会シンポジウム：京劇と日本：梅蘭芳を中心に 開催日：2013年12月20日(金) 場所：慶應義塾大学三田キャンパス東館6-7階 G-SEC Lab
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01060001-0076

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

2013年度慶應義塾大学藝文学会シンポジウム

京劇と日本 ― 梅蘭芳を中心に ―

那宅花園における 梅蘭芳と大倉喜八郎の邂逅

― 1919年梅蘭芳帝国劇場公演の起点と『天女散花』¹

平林 宣和

はじめに

2014年は、不世出の京劇男旦（女形）俳優、梅蘭芳の生誕120周年に当たる。中国では近年、梅蘭芳の名を冠した劇場や研究所などが次々に開設されており、今回の生誕120周年の関連行事も、記念公演やシンポジウムなど数多く計画されていると聞く。さらに5年後の2019年は、1919年に梅蘭芳初の訪日公演が実現してからちょうど百周年であり、京劇の国際化あるいは日中間の文化交流にとって大きな節目の年となる。京劇初の本格的海外公演とされるこの訪日公演は、東京の帝国劇場における十二日間の上演を皮切りに、約一カ月をかけて大阪、神戸を巡演、梅蘭芳の舞台姿に当時の日本の学者、文化人をはじめ多くの観客が魅了された。

この訪日公演に関して、当時梅蘭芳を囲むブレイン集団綴玉軒の中核的存在であった斉如山は、「（この公演の）原動力は我々の側にあったのではなく、すべて相手側が率先して契約に訪れたのだ」と語っている（斉如山、2005年、132-133頁）。この回想に従えば、1919年の訪日公演を実現させたそもそもの原動力は日本側にある、ということになる。当の梅蘭芳自身は、訪日公演のきっかけについて、以下のように回想している。

私が1919年に初めて日本に海外公演に行くことになったのは、東京の帝国劇場の会長である大倉喜八郎が北京を訪問し、私の演じる『天女

散花』を観て、日本に招聘しようという考えを持ったからである（梅蘭芳、1987、550頁）。

大倉財閥当主で当時帝国劇場の会長を務めていた大倉喜八郎と梅蘭芳との北京における邂逅が、すなわち齊如山の語る原動力の直接の起点であった。訪日公演の契機となった大倉の北京での観劇については、上記の回想を含めて数多言及されており、京劇史においては半ば常識となっている。しかしながら一方で、それがいつどのような形で実現したのか、未だ緻密な考証はなされていない。

梅蘭芳の初訪日公演を実現させる原動力の起点となったこの邂逅は、日本における本格的な京劇受容のスタートラインであると同時に、京劇が国際的に広く認知される直接のきっかけであったと言ってもよい。小論は、この重要な出来事がいつどこでいかなる形で起こったのか、可能な限り詳細に明らかにすることを目的としている。資料としては当時の大陸、日本、台湾の新聞記事のほか、関係者の回想録などを参照した。なお文中で引用する中国語の資料はすべて日本語に翻訳し、また資料中の旧字体は新字体に改めてある。

一、「蘭芳演劇得獎」

1917年12月2日、梅蘭芳が三作目の古装新戯『天女散花』を吉祥園で初演した翌日の『順天時報』に、以下のような記事が掲載された。

中国、交通、塩業、金城、新華の五銀行が、先日合同で金魚胡同にある那宅花園に宴席を設けて芝居を上演し、ある銀行の顧問を歓待した。この宴席には日本の林公使、および日中双方の名士が多数参加していた。当日梅蘭芳が演じたのは新作の『天女散花』であり、客人達に大いに喜ばれた。この時日本の大倉男爵が梅蘭芳に金時計を贈り、称賛の意を表した。

「蘭芳演劇得奨」というタイトルの付いたこの記事は、中国の主要五銀行が当時北京の金魚胡同にあった那宅花園で宴会を催し、その場に芝居を呼んで某銀行顧問を歓迎したことを伝えている。宴席に呼ばれる芝居のことを中国では堂会戲といい、宴席そのものは堂会与称するが、この時の堂会で芝居を披露したのが、ほかならぬ梅蘭芳であった。演じたのは新作の『天女散花』であり、さらにそれを観た日本の大倉男爵が金時計を贈った、というエピソードがそのまま記事のタイトルとなっている。

この出来事は先述のように『天女散花』初演の折に起きており、それ以前に外部の日本人が彩排（ゲネプロ）などで『天女散花』を観る機会はおそらくなかったであろう。さらに記事中の「大倉男爵」は、大倉喜八郎が1915年に男爵位を得ており、また後に詳しく検討するように当時中国を訪問中だったことは明らかであるから、大倉喜八郎その人と判断して間違いはないと思われる。すなわち「大倉喜八郎が北京を訪問し、私の演じる『天女散花』を観」たとする梅蘭芳の回想は、この記事の伝えるエピソードを指していると考えてよい。大倉喜八郎自身も、1919年の梅蘭芳の訪日公演に際して以下のような発言を残している。

彼と既知の間柄なる大倉喜八郎男は「梅蘭芳は私が一昨年渡支して会った時から来遊の意を語っていたのだから今度は愈々来ることになるだろう…」云々と語って居た²。

文中の「一昨年」はすなわち1917年であり、「渡支して会った時」というのは那宅花園の堂会を指していると見てよいだろう。この記事に関する言及は小論が初めてではなく、中国においては陳義敏（1993、200頁）がこの記事をそのまま京劇史年表の一部に組み入れており、吉川良和（2012、595頁）も大倉喜八郎と梅蘭芳との縁の始まりとして紹介している。また筆者自身も、『天女散花』についての論考の中で部分的に言及した（平林宣和、2012、196頁）³。しかしこれらの先行研究は、いずれも以下の一点を明らかにしていない。すなわち記事中の「先日（原文では日前）」が、果た

していつを指しているかという点である。

12月2日の記事であるから、12月1日以前の出来事であることは疑いがないが、「先日」という曖昧な表現であるため、それが具体的に何日を指すのか、この記事だけでは判断がつかない。仮に12月1日であれば、先日と書かずはっきり昨日と書くはずで、この点からすると12月1日より前に起こった出来事である可能性も決して低くはない。もし12月1日より前ということであれば、通常12月1日吉祥園とされる『天女散花』の初演よりも早い上演となる。一般の商業劇場での公演とは異なった、堂会という特殊な文脈ではあるものの、部外者を相手とした対外的上演であることは確かであり、『天女散花』の初演はその期日を何日か遡らなければならない。すなわちこの日付の確定は、大倉喜八郎と梅蘭芳との邂逅、および梅蘭芳の代表作である『天女散花』の初演という二つの出来事に関わる重要なトピックとなるのである。はたして堂会が開かれたのはいつだったのか、以下検討を進めていきたい。

二、梅蘭芳と大倉喜八郎の動向

まずは吉祥園での初演日である12月1日の梅蘭芳および大倉喜八郎の動向を、当時の資料により可能な限り明らかにしておきたい。かつての中国では、一日のうちに複数の場所において掛け持ちで芝居を演じることもよくあり、12月1日に先述の堂会が行われた可能性も依然排除できないからである。

梅蘭芳が12月1日に吉祥園で『天女散花』を初演した事はすでに通説となっているが、その上演の時間帯については検証されていないので、まずその点を明らかにしておこう。『天女散花』初演時には、『順天時報』を中心に複数の劇評が発表されているが、そのうちの一つ、筆名「四」による「記梅蘭芳之天女散花」という文章に以下のような記載がある。

先週の土曜日に『天女散花』が初演されると聞いて、「梅毒」（訳注：当時梅蘭芳の芝居の虜になることを「梅毒」と呼んだ）の症状が出る

のを禁じ得ず、時間を作って観劇に赴いた。劇場に入った時はすでに三時であったが、幸い友人が代りに席を取っておいてくれた。さもなければ足を踏み入れる余地も無かったであろう。「散花」の場が済んで芝居が跳ねた時はすでに六時過ぎであった。⁴

冒頭の「先週の土曜日」とは12月1日を指しており、この文章が『天女散花』の初演を観て書かれたものであることは明らかであろう。この劇評で重要なのは、おおよその上演時間が記されている点で、劇場に入ったのが三時、芝居が跳ねたのは六時過ぎとしている。午後三時にすぐ芝居が始まったかどうかは判然としないが、初演時の『天女散花』は現在のように「雲路」一幕のみの折子戯（みどり狂言）ではなく通して上演されているので、最低でも二時間程度は要したと考えられる。いずれにしても梅蘭芳が当日の三時から六時過ぎの時間帯に吉祥園にいたことは確実であろう。

さて堂会の会場になった那宅花園⁵は清朝の貴族である那桐の邸宅で、頻繁に堂会が開かれたことで知られるが、記事にあるようにその所在地は金魚胡同であった。金魚胡同は王府井の北東側にある路地で、新中国成立後も同じ名称で呼ばれている。この金魚胡同には二十世紀末まで吉祥戲院という劇場があり、閉鎖されるまでは北京における京劇の常打ち小屋の一つとなっていた。この吉祥戲院がすなわち当時の吉祥園であり、堂会の行われた那宅花園と『天女散花』が初演された吉祥園は、ごく近所にあったということになる。

堂会が何時に行われたか、記事には記されていないが、梅蘭芳が吉祥園における『天女散花』上演の前後に那宅花園の堂会に赴くことは不可能ではなかったろう。『天女散花』は載歌載舞（歌いつつ舞う）のスタイルを採った演者には体力的負担の大きい芝居であり、それを一日に二回も演じることは実際には考えづらいが、当日三時から六時過ぎ以外の梅蘭芳の動向がわからない以上、堂会が同日に行われた可能性は捨てきれない。

一方の大倉喜八郎の動向はどうだったのであろうか。1928年の大倉逝去の後に刊行された『鶴翁余影』掲載の年譜（706頁）には、大正6（1917）

年12月に大倉が「南満洲に出張し、本溪湖製鉄第二溶鋳炉火入式に臨み、並に支那各地を歴て帰京す」とある。また後の研究書である『大倉財閥の研究』掲載の「大倉財閥関係年表」1917年12月の項（882頁）には、上記引用と同様、「喜八郎、本溪湖第二溶鋳炉火入式のため満州行、のち中国視察」と記している。両者とも本溪湖の溶鋳炉火入式への参加を主要目的と位置付け、その他はついでという扱いだが、いずれにしても1917年12月に大倉喜八郎が中国大陸を訪問していたことは確かであろう。

当時の大倉のより詳細な動向は、各種新聞記事から一部確認が可能である。『大公報』の記事（12月1日）は、11月30日午後3時⁶に北京で当時の総統代理馮国璋に謁見し、一時間程度会談をしたと伝えている⁷。また同記事は、本日（12月1日）午前8時に北京を出立して帰国の途に就くとし、同日の『晨报』もまた大倉が午前8時に北京を出て帰国するという予定を伝えている。

これらの記事を信用すれば、大倉喜八郎は11月30日夜には北京におり、翌12月1日の朝には北京を発ってしまったことになる。しかしその後『大公報』（12月3日）に掲載された要人の出入りを伝える「車站記事」では、「一日、日本の大倉喜八郎男爵が夜の列車で北京を発ち天津を經由して奉天に向かった」としている。また同日の『順天時報』、「冠蓋往来」は、12月2日に東站から北京を出立した人物として、大倉の名を挙げている。両者には出発時間に相違があるが、いずれもしても、1日朝に北京を出て帰国するというのは誤りであり、大倉が少なくとも12月1日夜までは北京に滞在していたことは確かであろう。北京から直接帰国するというのが単なる誤報なのか、あるいは急遽予定が変わったのかは判然としないが、12月1日夜まで北京にいたのであれば、この日に堂会が催されたとしても、そこに足を運ぶことは可能だったはずである。

北京を離れた大倉喜八郎はその後12月2日夜に奉天に到着、翌3日には張督軍（張作霖）と会談し、5日午後には本溪湖に移動、7日には大倉自身が創業し株主となっていた本溪鉄鋳公司の第二溶鋳炉稼働式典に参加している⁸。先に引用した年譜では、「南満洲に出張し、本溪湖製鉄第二溶鋳炉火

入式」に出席した後、中国各地を歴訪したとなっているが、実際には先に北京に行った後に本溪湖へと向かったようである。北京から帰国という報が出回ったことも併せて考えれば、あるいは北京での用事がメインであった可能性もあるが、この点については今回の作業とは直接関係がないため、以後の検討課題としたい。いずれにしても、12月1日に堂会が開催された可能性はまだ残されている。

三、1917年11月29日

さて、12月1日前後の梅蘭芳と大倉喜八郎の動向を検証しても、依然として12月1日に堂会が開かれた可能性は排除できない。しかし一方で、1919年の梅蘭芳来日公演直前に各種新聞に発表された文章には、堂会での上演が吉祥園での初演に先行する、という証言が散見される。たとえば同年4月13日の『台湾日日新報』には、以下のような記事が掲載されている。

梅蘭芳の訪日については、久しく検討が続けられてきた。私が今も思い出すのは、日本の大資本家である大倉喜八郎男爵の来京である。各銀行が那宅花園で宴会を開き、梅蘭芳を呼んで特別に新作の『天女散花』を披露してもらった。梅蘭芳がこの芝居を演じるのは実はこの時が初めてであった。当時大倉男爵は梅蘭芳にぞっこんになり、高価な時計を梅蘭芳に贈呈し、併せて日本の帝国劇場での公演を約したのである。⁹

この文章の作者が誰かは判然としないが、文面から那宅花園での堂会に出席した人物ではないかと考えられる。その人物が、梅蘭芳が『天女散花』を演じるのはこれが初めてであった、と明確に語っているのである。また日本側においても、大倉をサポートして訪日公演を実現させた龍居松之助（雅号枯山）が、梅蘭芳の訪日公演直前に以下のような発言をしている。

「天女散花」は決してそんなに古いものではなく、全く蘭芳のために、

書き卸されたもので、現にその作者なる齊君も今度の一行に加わってやって来るのである。而もその書かれて初めて那桐氏の邸で演じられたのは数年前のことである¹⁰。

以上のように、大倉の傍らで公演の実現に向けて奔走し、梅蘭芳の来日後一行に付き添った龍居松之助も、那宅花園での堂会が『天女散花』の初演であると証言しているのである。この二つの証言を裏付けるデータは、これまで多くの資料を引用してきた『順天時報』や『大公報』などの新聞からは残念ながら見出すことが出来ない。一方で、『大公報』と並ぶ当時の大新聞であった『天津益世報』には、那宅花園での堂会を報ずる以下の記事が掲載されている。

先日の夜（11月29日）に、中国、交通、塩業、金城、新華の五銀行が合同で那宅花園を借り、某銀行の顧問である日本人の某氏を歓迎する宴を開いた。謝林が総幹事となって一切の準備をし、さらに梅蘭芳、王鳳卿、劉喜奎、鮮靈芝など男女の名優を呼んで得意の芝居を披露してもらい、賓客を楽しませた。謝氏は梅蘭芳に新作の『天女散花』を演じてもらうよう計らい、宴席は大いに盛り上がり、参会した各銀行の行員たちも大喜びであった¹¹。

以上のように、この記事是那宅花園の堂会の期日を明確に11月29日と記している。同様の記事は『晨报』にも掲載されており、上記とはほぼ同内容であるが、細部が異なっているため、以下に訳出しておく。

昨晚（29日）に中国、交通、塩業、金城、新華の五銀行が合同で那宅花園を借り、日本から新たに訪中した大倉喜八郎氏を歓迎する宴を開いた。さらに梅蘭芳、王鳳卿、劉喜奎、鮮靈芝など男女の名優を呼んで得意の芝居を披露してもらい、賓客を楽しませた。謝氏は梅蘭芳に新作の『天女散花』を演じてもらうよう計らい、宴席は大いに盛り上

がって、参会した各銀行の行員たちも大喜びであった¹²。

先行する『晨报』の記事は主賓を大倉喜八郎とし、続く『天津益世報』は某銀行の顧問である日本人の某氏と直接には名前を記していない。また『順天時報』の記事とは異なって、いずれも大倉が梅蘭芳に時計を贈呈したというエピソードは紹介しておらず、那宅花園での堂会を報じた三つの記事には細部において異同が見られる。いずれにしても両記事は、堂会の期日を11月29日と明確に書き記しており、那宅花園の堂会は吉祥園での『天女散花』の初演と同日ではなく、その二日前、1917年11月29日に行われたものと確定してよいだろう。

結び

以上の検証により、1917年11月29日の那宅花園における堂会が、梅蘭芳と大倉喜八郎の邂逅の場であり、同時にまた古装新戯『天女散花』の初めての対外的上演の機会でもあったことが確認された。この日付を起点として、齊如山の語った日本側の「原動力」が実際に駆動し始め、以後の日本における京劇受容の流れを作り出していくのである。同時にそれは、民国初期以降の京劇の国際化を後押しする主要な力の一つとなった。

一方で以下のような疑問も残る。そもそもこの出会いは全くの偶然であったのか、あるいは何らかの形で計画されたものだったのか。さらに大倉喜八郎及び帝劇首脳陣は、梅蘭芳に関する情報をこの堂会以前にどの程度得ていたのか。たとえば当時大倉の近辺にいた東京商業会議所副会頭の山科礼蔵（1919、195頁）は、梅蘭芳の訪日公演とほぼ同時期に出版した自身の訪中記の中で以下のように記している。

我が帝国劇場にても同優を聘せんとし、昨年（筆者注：1917年）大倉男が渡支の際其の出演を懇望されたのであるが、数万円の費用と報酬とを要する為め、遂に不調となったのであった¹³。

この資料は文面から梅蘭芳訪日公演の前年、1918年に書かれたものであることがわかるが、この個所は大倉喜八郎の訪中以前に、帝国劇場が梅蘭芳の訪日を計画していたという風に読むことも可能だろう。しかし大倉喜八郎と帝国劇場首脳陣が、那宅花園の堂会以前にどの程度梅蘭芳に関する情報を得ていたのかは、現時点では不明である。

一方、梅蘭芳のブレイク集団綴玉軒の主要メンバーである馮耿光は、当時中国銀行の総裁を務めていた人物であり、財政面を中心に梅蘭芳の活動を早くからサポートしていた。馮耿光は日本留学の経験があり、大倉喜八郎とも懇意だったことは、大倉逝去の際に梅蘭芳とともに弔辞を送っている（鶴友会、1929、637頁）ことからもうかがえる。那宅花園の堂会は中国銀行その他四銀行が主催したものであり、この機会に梅蘭芳の発展を願う馮耿光が両者の仲を取り持った、ということも考えられるだろう。

こうした1917年11月29日以前の様相に関しては、現状では不明な点が多いが、一方で清末から民国初期にかけて現地で京劇に親しむ日本人が少なからず出現し始めていたことは確かである。そうした人々のもたらす情報がどの程度東京に届いていたのか、またこのような流れの中に那宅花園での堂会がどう位置づけられるのか、以後引き続き検討していきたい。

参考文献

- 伊藤綽彦 1981 「一九一九年と一九二四年の梅蘭芳来日公演について」、『中嶋敏先生古希記念論集』下巻、汲古書院。
- 大倉財閥研究会編 1982 『大倉財閥の研究』、近藤出版社。
- 鶴友会 1929 『鶴彦余影』、非売品。
- 吉川良和 2012 『北京における近代伝統演劇の曙光——非文字文化に魂を燃やした人々——』、創文社。
- 齊如山 2005 『齊如山回憶録』、遼寧教育出版社。
- 平林宣和 2012 「『天女散花』考——梅蘭芳古装新戲の再検討」、『演劇映像学 2011 第2集』、早稲田大学演劇博物館グローバル COE プログラム「演劇・映像の国際的教育研究拠点」。
- 梅蘭芳 1987 『舞台生活四十年』、中国戲劇出版社。
- 山科礼蔵 1919 『鵬程千里 渡支印象記』、非売品。

註

- 1 小論は、2013年5月17-19日に北京の中国戯曲学院で開催された「第五屆京劇学国際学術研討会 梅蘭芳與京劇的傳播」において中国語で発表した研究報告の一部を、慶應義塾大学山下輝彦教授の退職記念として2013年12月20日に催された慶應義塾大学藝文学会シンポジウム「京劇と日本——梅蘭芳を中心に」にて、あらためて日本語で報告した内容に基づき執筆したものである。口頭および活字による研究成果公開の機会を与えてくださった山下輝彦教授および慶應義塾大学藝文学会に深謝申し上げる。
- 2 『東京日日新聞』、1919年3月1日。
- 3 筆者はこの論考の中で、堂会の行われた日程は定かではない、としている。小論はこの時の問題提起に対する回答でもある。
- 4 「記梅蘭芳之天女散花」、『順天時報』、1917年12月4日。
- 5 現在は主に那家花園と呼ばれている。所在地は今の和平飯店のある場所とほぼ一致し、地名としても残っている。
- 6 12月1日の『順天時報』、「大倉氏晋謁総統誌」も同様の消息を伝えるが、こちらは謁見の時刻を午後4時としている。
- 7 「大総統謁見大倉氏」、『大公報』、1917年12月1日。
- 8 「日本実業家到奉」、『大公報』、1917年12月7日。
- 9 「梅郎東行之確定」、『台湾日日新報』、1919年4月13日。
- 10 龍居枯山「支那劇の印象（一）」、『東京日日新聞』、1919年4月26日。
- 11 「飲宴日本銀行顧問」、『天津益世報』、1917年12月1日。
- 12 「各銀行公宴大倉氏 昨晚那宅之盛会」、『晨报』、1917年11月30日。
- 13 この資料については伊藤綽彦（1981、676頁）がすでに論及している